『点訳フォーラム』より回答

【質問】

小説特『刀剣乱舞ー花丸ー』　月ノ巻　猫田幸著の中に「行く先」という語3か所でてきます。校正で「行く先」は「ユクサキ」と点字フォーラム語例集とあり、①～③は「ユクサキ」と校正があがってきました。どのように考えればよいでしょうか。①は「イク■サキ」と考えられないでしょうか。「行く■先々」のように「行く」が動詞として働いている場合は「イク■サキ」とはならないでしょうか。

① そんな一匹と一振りの行く先に、甘酒を片手に酔っ払っている不動行光がいた。

② 滑車の取っ手に手をかけ、自身の行く先を鋭い眼光でとらえる。「いくぞ！」言葉と同時に走り出した･･･

③ つり橋の行く先にある洞窟から出てきた一期一振だ。

本丸の廊下を疾走する猫、それを必死に追いかける南泉。
そんな一匹と一振の行く先に、甘酒を片手に酔っ払っている不動行光がいた。
ドタバタと走る足音に気づいた彼は、不思議そうに呟く。
ソハヤノツルキに促され、大典太は滑車の取っ手に手をかけ、自身の行く先を鋭い眼光
「こら。危ないことするんじゃないぞ」
厚たちを注意したのは、吊り橋の行く先にある洞窟から出てきた一期一振だ。
「「「はーい！」」」
厚たちは素直に返事をする。

【回答】　　①②③「ユクサキ」

この①～③ともに「行き先、目的地、目当ての場所」と言い換えても不自然ではないので、続けて書く方がよいと思います。「行く先」は元々「行く」という動詞と「先」という名詞からできている複合語ですので、動詞「行く」の意味も内包しているため、「行く」の意味が強いかどうか、という考え方で判断しようとすると人によって捉え方にばらつきが出ると思います。またご意見として、不動が立っている方へ向かっていったわけでなく、走っていったら不動がいたという内容なので、目的地の意味に合わないとありますが、目的地にたまたまその人がいたというだけですので、「行く先」の解釈に不都合を生じる理由にはならないと思います。「行く先」のような語の解釈を広げていくと、点訳に揺れが生じたり、人によって判断が異なったりしてきます。点訳フォーラムとしては、ご質問の場合は、すべて「ユクサキ」と続けた方がよいとお答えします。

『指導者ハンドブック　第2章』より

「行く」は「いく」？「ゆく」？

「学校に行く」は「いく」でしょうか？「ゆく」でしょうか？

また問題用例にある「行き交う」は「いきかう」でしょうか？「ゆきかう」でしょうか？

『点訳のてびき入門編』（昭和56年3月20日初版第1刷発行）には、〈「行く」は口語では「イク」と書く。ただし複合語で「ユク」と発音する場合は「ユク」と書き表す〉とあり、「行く末」（ユクスエ）「先行き」（サキユキ）の例がありました。第2版、第3版には、この表現はありませんが、基本的な姿勢は変わっていません。

辞典類を見ると、昔は「ゆく」の方がより標準的と考えられていたようですが、現在では、小学校の国語教科書などを見ても「いく」の方が多く用いられています。また、「いく」の連用形が「て」「た」「たり」に続く場合、「いっ（て・た・たり）」という促音便の形が使われますが、「ゆく」の方には、「ゆっ（て・た・たり）」という言い方はありません。

このように「ゆく」の用法が限られているという点でも、現代の口語としては「いく」の方が基準となっています。「春の小川」の歌詞も、以前は「はるのおがわは、さらさらゆくよ」と歌われていましたが、現在の教科書では「さらさらいくよ」となっているようです。

ただし、次のような語は常に「ゆく」が使われ、「いく」とは読まれませんので注意しましょう。国語辞典を見ても、「ゆく」が本来の読み方であることが分かります。

行き交う　　行きがた知れず（ユキガタ■シレズ）　　行き暮れる　　行きずり（の人）
行きつ戻りつ（ユキツ■モドリツ）　　行き悩み　　行き場（がない）　　行きまどう
行きまよう　　行く秋（ユク■アキ）　　行くえ（不明）　　行く先々　　行く末
行く手　　行く年（返る年）（ユク■トシ）　　行く春（ユク■ハル）　　行く行く

このように、問題の「行き交う」は「ゆきかう」と読むことが分かります。

〈参考〉『言葉に関する問答集　総集編』（文化庁　2005 年1月）

45. p14　3. 調査　　『点訳フォーラム』より

「行き場」「行く先々」の読みについて

「てびき3版　指導者ハンドブック 第2章編」p10 に《次のような語は常に「ゆく」が使われ、「いく」とは読まれませんので注意しましょう。国語辞典を見ても、「ゆく」が本来の読み方である》とあり、その中に「行き場（がない）」があります。点訳フォーラムの語例で調べると、「イキバガ■ナイ」となっていて注記として「ユキバとも」とあります。ハンドブックとの違いはなぜでしょうか。「イキバ」と読んでいいとしても、なぜ「ユキバ」の方が注記になるのでしょうか。

「行く先々」もなぜ「イク」も可になっているのでしょうか。

話の持って行き場が無い	ハナシノ■モッテ■イキバガ■ナイ	「行き場」は「ユキバ」とも

行く先先；行く先々	ユク■サキザキ	「イク■サキザキ」も可

【A】

語例集の場合は「話の持って行き場がない」ですので、「持って行く」に「場」が付いた形です。この場合の「行き」は補助動詞ですので、単独の「行き場」と異なり、「いき」と発音することも多いと思います。そのために「読み」を「いきば」とし、注記に「ゆきば」を付けました。

「行く先々」も、「行く」という動詞の意味が強く、「行く■先々」とマスあけしますので、注記はそのままにしたいと思います。

行く先	ユクサキ	
行く先先；行く先々	ユク■サキザキ	「イク■サキザキ」も可

行き先を尋ねる	ユキサキヲ■タズネル

行く当ても無い	ユク■アテモ■ナイ	「イク■アテモ■ナイ」も可

9. p104　1. カギ類　　『点訳フォーラム』より

「「「「したいに決まってんだろう！」」」」

この文面でカギが4個重なって書かれているのですが、点訳を「したいに■きまってんだろー！」としたのですが、「点訳挿入符」で説明が必要でしょうか。必要とすれば、どのように点訳すればよいでしょうか。「てびき」にもないので同じ記号を重ねることはできないと思います。

【A】

大勢の人が同時に発言したことを表しているのかもしれませんが、前後の文脈で理解できると思いますので、一つの第1カギで囲んで書いてよいと思います。

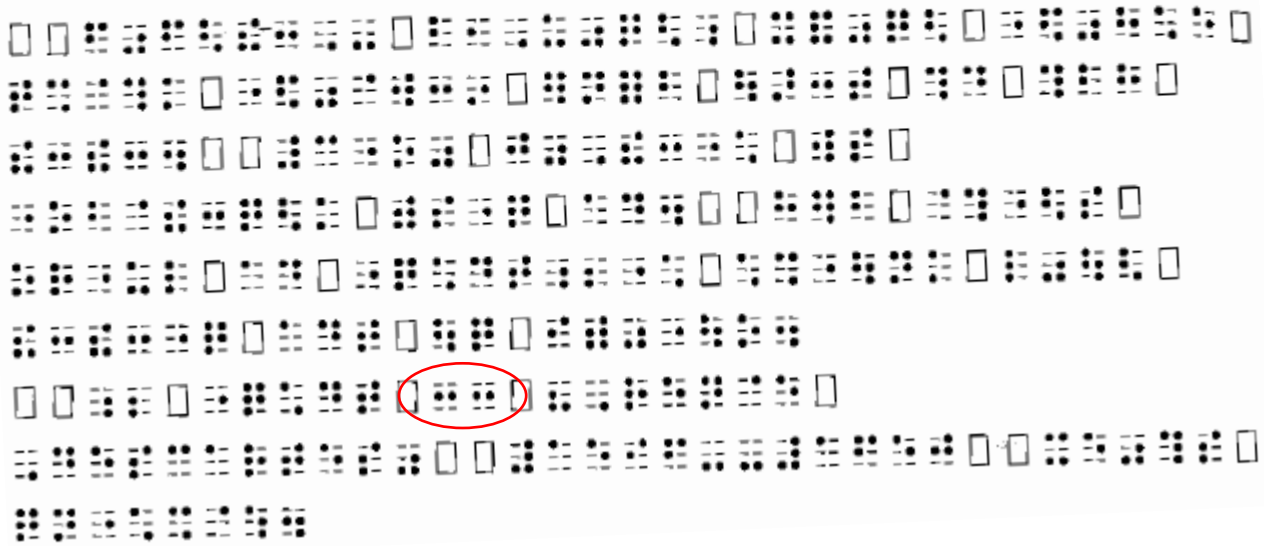
「シタイニ■キマッテンダロー！」

てびき 123-124 ページ
文中注記符　⠐⠂⠂⠐

(6) 注記の見出しは原文を参考にし、文中注記符だけを書くか、または該当事項を添えて書く。文中注記符だけを書く場合は、後ろを一マスあけて注記を書く。該当事項を添えた場合は、注記との間を二マスあけたり、棒線・点線や第１小見出し符を用いて書く。

指導者ハンドブック第 4 章より
文中注記符がついた語句と説明の間は、二マスあけ（⠀⠀）、棒線（⠤⠤）、点線（⠒⠒⠒）、第一小見出し符（⠰⠰）のどれでも誤りではありません。

演繹法：一般的、普遍的原理から特殊な現象を説明しようとする推理方法。三段論法がその代表的なものである。理性主義の立場にあるデカルト＊ が確実な認識方法であるとして重んじた。
＊ デカルト René Descartes 1596～1650 フランスの哲学者。



『点訳フォーラム』より
15. p123　3.文中注記符
原文の注記が＊や※ではなく、(1) (2) や1. 2. ･･･のように書いてある場合は、どのように点訳すればいいでしょうか。

【A】
墨字では「てびき」p124 の例のように「＊ 1」の形や、(注1) (1) など様々な形が見受けられますが、原本でどのように書かれているかに関わらず、語や文をマークしておいて後で説明を記載する方式で処理する場合に、点字では文中注記符を用います。なお、原文で(注1)のようにカッコに囲まれているからといって、文中注記符をカッコに囲む必要はありません。文中注記符だけを書きます。
文中注記符を用いる場合は、注の説明を書く箇所でも、墨字原本の書き方に関わらず、文中に用いた文中注記符を冒頭に記載して、対応を明らかにします。「てびき」p124 の例でも、墨字原文では冒頭に「注1」とありますが、点訳例では数字をはさんだ文中注記符になっています。

『点訳のてびき第３版Ｑ＆Ａ　2集』より
【Q 89】 「…君主制(*1)・・・」のような場合、注記符をさらにカッコで囲むと複雑になりますが、原文通り書くのでしょうか。

A　この場合カッコは省略し。文中注記符のみで示します。
クンシュセイ⠨⠨⠠⠨⠨　となります。

『点訳のてびき第３版Ｑ＆Ａ』より
【Q106】 文中注記符の(2)に「その後ろは分かち書きの原則に従う」とあります。では、「ENS＊1とは～」や「pretend＊1とは～」のように、アルファベットや外国語の後ろに文中注記符が付いた場合はどうなりますか？

A　文中注記符は、語句や文の直後に書きます(「てびき」(P123　3.(2)、P131. (4)参照)ので、外字符に続くアルファベットや外国語引用符の閉じ記号にも続けて書きます。そして、その後ろは分かち書きの規則に従います。
　助詞・助動詞は、アルファベットや省略符としてのピリオド、および外国語引用符の後ろに続く場合は、前を区切って書きますが、間に文中注記符が入ると外国語引用符などと助詞・助動詞が続きませんので、一続きに書きます。
　ご質問の語は次のようになります。
⠨⠨⠨ ENS⠨⠨⠠⠨トワ
⠨ Pretend ⠨⠨⠨⠠⠨トワ

《Q》 < Microelectronics*1〉のように長い語に文中注記符が付いているとき、文中注記符の前で行移しをしてもよいのでしょうか？

《A》 P148　2. (1)を参照してください。数符つきの文中注記符の前では行移しできます。

備考 行移しは、行末があきすぎる場合などに次の箇所で行うことができる。

(1) 本来続けるべきカッコ類や点訳挿入符の前、数字付きの文中注記符の前

【Q107】 文中注記符の内側には、数字以外のものをはさんではいけないのでしょうか？

A　文中注記符 p123 にもあるように、文中注記符には数字をはさみます。
　数字以外のものは、はさむことができません。

《Q》 一つの言葉に「注2、注3」などと二つ以上書いてある場合は、どう書くのでしょうか？

《A》 一つの言葉に注が二つ以上付いている場合は、それぞれに文中注記符を用い、続けて書きます。
夏目漱石*1*2

『点訳のてびき　第４版』より　189-190 ページ

コラム 34

注記や写真説明などの入れ方

本文が終わって次の見出しが始まる前に、注記や写真説明などを挿入するとき、その間に仕切りのための線を入れたり、段落と段落の間に入れる場合は、枠線を使用したりすると分かりやすいでしょう。

区切り線は１行あけより大きな区切りを示しますので、見出しと見出しの間を１行あけにしている場合には、それより小さい区切り目には用いることができません。そこで、行頭のあけ幅を４マスか６マス程度にして、行の中央か少し後ろまで、仕切りのための線を引きます。②⑤の点または②の点を用います。

下に一例を示しますが、点の種類や行頭のあけ幅、マス数は特に決まったものではありません。分かりやすく読みやすいように工夫しましょう。

《段落と段落の間に注記を入れる場合の例》

固定電話の通話時間と行為者率を 2005 年と 2010 年で比較すると、全体平均では両者とも減少傾向にある＊。携帯電話の普及による結果と考えられるが、年齢層別にみると、それぞれ異なったパターンを示している。

まず、10 代は通話時間が 0.3 分、行為者率が 1.2％でありほとんど利用されていない。完全に携帯電話の影響と考えられる。～

＊電話の通話時間については 2000 年調査までと 2005 年以降の調査では回答の記入形式が異なるためここでは 2005 年以降のデータのみを比較した。

□□コテイ□デンワノ□ツーワ□ジカント□コーイシャリツヲ□
⠼２００５ネント□～□ゲンショー□ケイコーニ□アル⠿⠿⠿□□
ケイタイ□デンワノ□～□パターンヲ□シメシテ□イル⠲
⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒
□□⠿⠿□デンワノ□ツーワ□ジカンニ□ツイテワ□～□
データノミヲ□ヒカク□シタ⠲

⠂⠂⠂
□□マズ⠆□⠼１０ダイワ□ツーワ□ジカンガ□⠼０・３プン⠆□～

《見出しの変わり目に注記を入れ、１行あけて次の見出しを書く場合》

～社会的障壁に目を向ける社会モデル＊1 の視点を持つことが必要になります。

＊１社会モデル：障害を主として社会によって作り出された問題と見なす障害のとらえ方

シャカイテキ□ショーヘキニ□メヲ□ムケル□シャカイ□
モデル⠿⠿１⠦ノ□シテンヲ□モツ□コトガ□ヒツヨーニ□
ナリマス⠲
□□□□⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒⠒
□□⠿⠿１⠦□シャカイ□モデル□⠒⠒□ショーガイヲ□
シュトシテ□シャカイニ□ヨッテ□ツクリダサレタ□モンダイト□
ミナス□ショーガイノ□トラエカタ
□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□
□□□□（次の見出し）

『日本点字表記法　2018 年版』 76 ページ～

6．注の参照を示す文中注記符

(1) 補足や引用などの注記が本文とは別の場所にあり、本文中に注記の参照を示す場合、その語句の直後に文中注記符を続けて用い、その後ろは分かち書きの規則に従う。注に番号を付ける場合には ⠼⠁⠼⠁ ⠼⠁⠼⠁ のように書き表す（アルファベットや仮名は用いない）。同じ語句に複数の注を付ける場合、隣り合う注記符は続けて書き表す。

［例１］

⠀⠀⠼⠁イカ⠀⠼⠁ノ⠀ツイタ⠀ゴワ⠼⠁⠀カンマツノ⠀⠼⠁ヨーゴ⠀
カイセツ⠼⠁ニ⠀オイテ⠀セツメイ⠀サレテ⠀イル⠼⠁⠼⠁
⠀⠀トージノ⠀アメリカノ⠀ダイトーリョー⠼⠁⠼⠁⠀⠼⠁⠼⠁⠼⠁

［　［以下 ＊ の付いた語は、巻末の「用語解説」において説明されている。］
　当時のアメリカの大統領*‥‥　］

［例２］

⠀⠀⠼⠁⠼⠁ワガハイワ⠀ネコデ⠀アル⠼⠁⠼⠁⠼⠁⠼⠁⠼⠁⠼⠁ト⠀
⠼⠁⠼⠁マイヒメ⠼⠁⠼⠁⠼⠁⠼⠁⠼⠁⠼⠁⠼⠁⠼⠁⠀⠼⠁⠼⠁⠼⠁
（『我輩は猫である』*1と『舞姫』*2*3‥‥）

【注意】文中注記符を用いる場所は語句や文の直後を原則とするが、注記があることをいち早く知らせる必要がある場合等では、語句や文の直前に置いてもよい。

(2) 注は、該当ページの下部に線を引くなどして、本文との区別が明瞭になるようにして挿入する。ページ内に入るように記載し、ページが変われば本文に戻ることを原則とする。章や節の最後か巻末に一括して記載する方法もある。注の見出しには、該当する文中注記符を書き、必要があればそれに該当語句をも取り出して表示する。

［例］

□□アウグスティヌスノ□セイネン⠶⠶⠶⠶□ジダイワ□
スギサリ⠶□スデニ□ソーネン⠶⠶⠶⠶□ジダイヲ□
ムカエヨート□シテ□イマシタ⠶
⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶□⠶⠶⠶□⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶⠶
□□⠶⠶⠶⠶□ローマノ□ネンレイノ□カゾエカタニ□ヨルト⠶□
⠶⠶⠶サイカラ□⠶⠶⠶サイマデヲ□⠶セイネン⠶ト□イッタ⠶
□□⠶⠶⠶⠶□ドーヨーニ⠶□⠶⠶⠶サイカラ□
⠶⠶⠶サイマデヲ□⠶ソーネン⠶ト□ヨンデ□イタ⠶

アウグスティヌスの青年*1時代は過ぎ去り、既に壮年*2時代を迎えようとしていました。

---

*1 ローマの年齢の数え方によると、15歳から30歳までを「青年」と言った。
*2 同様に、31歳から45歳までを「壮年」と呼んでいた。

【備考】墨字では、注の参照符号に米印やアステリスク・剣印・丸数字などさまざまなものを用いたり、複数の注をアステリスクなどの数の違いで表すこともあるが、点字では文中注記符で表す。なお、墨字原文との対応の観点などから、⠶⠶⠶⠶□⠶⠶⠶ などと書き表すこともある。

『点訳のてびき　第 4 版』 124 ページより

処理 1 ▶ 注の説明を本文と同じページに入れる必要がある場合は、そのページの下部に端から端までの線を引き、本文と区別して挿入することができる。この場合は、ページが替われば本文に戻るので、注の説明に必要な行数を正確に数えて、そのページに収まるように線を引かなければならない。（こちらを参照）

『点訳のてびき第 3 版 Q＆A』より

点字の教科書には脚注の処理などに多く用いられています。原文によっては、そのページにあった方が理解しやすい場合もありますし、プライベートサービスなどで希望される場合もあると思われますので、「必要がある場合は」と断って＜処理1＞を加えました。ただ、レイアウトが狂いやすいので、修正が生じた場合は十分に気を配る必要があります。

『点訳フォーラム』より

【質問】

中点について質問です。『水たまりで息をする」』高瀬隼子著で、以下の文が出てきます。

放流のサイレンが流れたのは、昼休みだった。外へ昼食を買いに出た同僚が慌ただしく戻り、「すごい雨」と興奮した様子で言った。その時、ピンポンパンと放送チャイムの音がした。「市役所にお越しのみなさまにお知らせです。本日、ダムの放流を行っています」そう説明する男性の声に続いて、ウーッ、と高いような低いような音でサイレンが鳴ったあと、女性の声でアナウンスが流れた。

「かわが・ぞうすい・しています・あぶない・ですので・ちかづかない・ように・しましょう」

衣津実が立つカウンターの近くに窓はなかったが、カウンターの窓口を横に五つ挟んだ先にある正面入口の自動ドアが開く度、外から雨の空気が入ってきた。

「かわが・ぞうすい・しています・あぶない・ですので・ちかづかない・ように・しましょう」の中点の処理ですが、『点訳のてびき』103 ページ(2)③で　原文の意図や読みやすさなどを考慮した上で、中点はマスアケに代えると、本来続けるべき助詞のところがマスアケになってしまいます。

著者は、アナウンスが途切れ途切れに聞こえることを、中点をつかって表現したいのではないかと思うのですが、どう点訳すれば伝わるのでしょうか？

【回答】

中点の働きは「対等な関係を表す」ことですので、点字で中点が使われていても、途切れ途切れに言っているんだなということは伝わらないと思います。ご質問の場合は、そこで切れて聞こえる（間があいて聞こえる）状況だと思いますので、中点の所を読点に置き換えて点訳するのがよいと思います。

「かわが・ぞうすい・しています・あぶない・ですので・ちかづかない・ように・しましょう」

→

「カワガ、■ゾースイ、■シテ■イマス、■アブナイ、■デスノデ、■チカヅカナイ、■ヨーニ、■シマショー」

となります。

ざあざあざ、音が耳の形にぴったりなじんでしまうほど長く、雨が降り続いた。

雨水の流れる道路はすべりやすいように見え、衣津実はいつもより早めに家を出た。山道を抜けるまで、のろのろと形容していいスピードで車を走らせた。道の隣を並走するように流れる川は、水量が多いものの氾濫する気配はない。夫は雨でもかまわず川に行ってしまうので、「とにかく気を付けてね」と何度も注意している。

放流のサイレンが流れたのは、昼休みだった。外へ昼食を買いに出た同僚が慌ただしく戻り、「すごい雨」と興奮した様子で言った。その時、ピンポンパンと放送チャイムの音がした。「市役所にお越しのみなさまにお知らせです。本日、ダムの放流を行っています」そう説明する男性の声に続いて、ウーッ、と高いような低いような音でサイレンが鳴ったあと、女性の声でアナウンスが流れた。

『かわが・ぞうすい・しています・あぶない・ですので・ちかづかない・ように・しましょう』

衣津実が立つカウンターの近くに窓はなかったが、カウンターの窓口を横に五つ挟んだ先にある正面入口の自動ドアが開く度、外から雨の空気が入ってきた。室内にいても分かるほどの濃い雨の気配を、けれど彼女は気に留めなかった。家はダムよりも上だから、そもそも放流とは関係がない。トイレに立った時に、夫に（ダム放流してるらしいよ）とメールを送ったが、返信はなかった。

『点訳フォーラム』より

その3　線類

1. p113　1. 棒線・点線

補足説明と思われる棒線の前後のマスあけについて、カギで囲まれた会話文の間にあります。

「もうお分かりでしょう」―彼女の言葉には、不安にさせるものがあった―「わたしの関心は精神的な面なのです。（以下略）」

この文の後は改行して次の段落が始まります。
カギと棒線の間、棒線とカギの間は記号間の優先順位から両方とも一マスあけでよいでしょうか？

【A】
　前後を棒線で囲んで、カッコ類と同じように、前の語句の説明をしています。この場合は、一つの文の中に含まれていると見なして、棒線の両側は一マスあけます。
「もうお分かりでしょう」■―■彼女の言葉には、不安にさせるものがあった■―■「わたしの関心は精神的な面なのです。

【新規】p113　1. 棒線・点線

　文を棒線で括っている時の点訳方法を教えて下さい。
原本で移民や冒険者に対する根強い偏見があるらしいデニスは、そうなるに至った大きな事件―冒険者だった父親の死に関する―があったという。
とあります。この時の棒線を点訳者は、原文通りに②⑤②⑤の点（⠤⠤⠤⠤）の棒線で点訳しています。原文通りで間違いとは思いませんが棒線で括った文が前の説明と考えて（～）に置き換えても良いですか。
校正の範囲外のことですが確認したいと思いました。

【A】
　この棒線の用法は確かに説明のカッコと同じですが、墨字の棒線にももともとそのような用法があります。
「点訳のてびき第3版指導者ハンドブック第4章編」の巻末にある「くぎり符号の使ひ方」の「（4）ナカセン」に《七、補助的説明の語句を文中にはさんでカッコでかこむよりも地の文に近く取り扱ひたい場合に用ひる》とあります。
ここから、これは棒線の用法の一つとして、墨字に対応して用いてよい棒線になります。
ですから、原本で使用している棒線をカッコに換えるように校正するのは、行き過ぎになると思います。

『点訳のてびき第3版指導者ハンドブック第4章編』の巻末にある「くぎり符号の使ひ方」より

くぎり符号の使ひ方〔句読法〕

(4) ナカセン	―	一、ナカセンは話頭をかはすときに用ひる（例1）。 二、語句を言ひさして余韻をもたせる場合に用ひる（例2）。 三、カギでかこむほどでもない語句を地の文と分ける場合に用ひる（例3）。 四、時間的・空間的な経過をあらはす（例45）。 五、時間的・空間的に「乃至」または「より――まで」の意味をあらはす（例67）。 六、かるく「すなはち」の意味をあらはす（例89）。 七、補助的説明の語句を文中にはさんで、カッコでかこむよりも地の文に近く取扱ひたい場合に用ひる（例10 11）。 八、ニホンナカセン（＝）を短いくぎりに用ひることがある（例12）。	(1) 「それはね、――いや、もう止しませう。」 (2) 「まあ、ほんとうにおかはいさうに――。」 (3) これではならない――といつて起ちあがつたのがかれであつた。 (4) 五分――十分――十五分 (5) 汽車は、静岡――浜松――名古屋――京都と、嵐の夜の闇をついて走つてゆく。 (6) そのきゝめは、少くとも三―五週間の後でなくてはあらはれません。 (7) 上野―新橋、渋谷―築地、新宿―日比谷の電車、終夜運転 (8) この海の中を流れる大きな河――黒潮は、 (9) 心持――心理学の用語によれば情緒とか気分とか状態意識とかいふのであるが、 (10) ふと、荒城の月の歌ごゑが――あの寄宿舎の窓からもれてくるのであらう――すゞしい夜風に乗つて聞えてくる。 (11) 方法論――それは一種の比較的形態学である――は、 (12) （東京・富田幸平＝教員）

『日本点字表記法 2018 年版』 より 70 ページ

6．補足説明の棒線

前の語句や文の補足説明をカッコ類で囲むより地の文に近く取り扱いたい場合、前後ろを棒線で囲んで書き表す。棒線の内側と外側の語句とは一マスずつあける。

［例］　ゴゼン□⠤⠤ジ□⠤⠤□ソノ□コロノ□⠤⠤ジト□
イエバ⠤□マダ□ウスグラカッタ□⠤⠤□ワタシワ□
トビオキタ⠤

［　午前５時 ― その頃の５時と言えば、まだ薄暗かった ― 私は飛び起きた。］